



ル・コルビュジェ

Le Corbusier(1887-1965 本名シャルル=エドゥアール・ジャンヌレ=グリ)は、時計製造で有名なスイスのラ・ショー=ド=フォンで生まれました。当地の装飾美術学校を出た後、ウィーン、ベルリン、パリで建築や工芸、芸術の新しい運動に触れます。建築はオーギュスト・ペレやペーター・ペーレンスに短期間師事したほかは独力で学んでいます。建築を設計する際には、研究を重ねたうえでプロトタイプ(基本型)を作成し、実際に建設される敷地や環境に応じて何度も考えなおすという手法を使いました。フランスを中心に活躍したル・コルビュジェは、合理的、機能的で明快なデザイン原理を追求し、20世紀の建築や都市計画に大きな影響を与えました。



United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

国際連合教育科学文化機関



The Architectural Work of Le Corbusier, an Outstanding Contribution to the Modern Movement inscribed on the World Heritage List in 2016

ル・コルビュジェの建築作品
-近代建築運動への顕著な貢献-
世界遺産登録年:2016年



国立西洋美術館

国立西洋美術館は、第二次世界大戦後フランス政府に差し押さえられていた松方コレクション(株式会社川崎造船所の社長であった松方幸次郎がヨーロッパで収集した西洋美術作品)の寄贈返還を受けるために設立されました。1955年、寄贈返還における条件のひとつとなっていた新しい美術館のために、日本政府はル・コルビュジェに設計を依頼しました。建設にあたってはル・コルビュジェのアトリエで学んだ3人の弟子、坂倉準三、前川國男、吉阪隆正が協力しています。多くの日本人建築家がル・コルビュジェの作品に影響を受け、ル・コルビュジェの建築思想は日本における近代建築運動に大きく貢献しました。

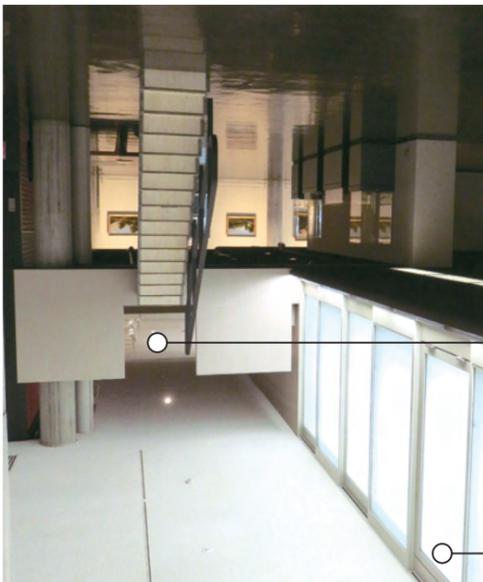


国立西洋美術館には絵画や彫刻と同じくらい重要なものがあります。それは美術館の建築そのものです。1959年に完成した国立西洋美術館は、20世紀を代表する建築家のひとりであるル・コルビュジェにより設計されました。「近代建築の5つの要点」を具体的に表現していることや「無限成長美術館」の思想を体現していること、また、日本における近代建築運動に大きく貢献したことが評価され世界遺産に登録されました。



©2017 国立西洋美術館 | デザイン:大岡寛典事務所

モジュール(室内)
ル・コルビュジェは人体の寸法をもとに建築各所の設計を行いました。柱は635cm間隔で均等に立てられており、2階展示室の低い天井、中3階の天井の高さは226cm、バルコニーの手すりの高さは113cmなど、建物のほとんどがモジュールの寸法になっています。



モジュール(外部)
モジュールは人体の寸法をもとに建築各所の設計を行いました。柱は635cm間隔で均等に立てられており、2階展示室の低い天井、中3階の天井の高さは226cm、バルコニーの手すりの高さは113cmなど、建物のほとんどがモジュールの寸法になっています。



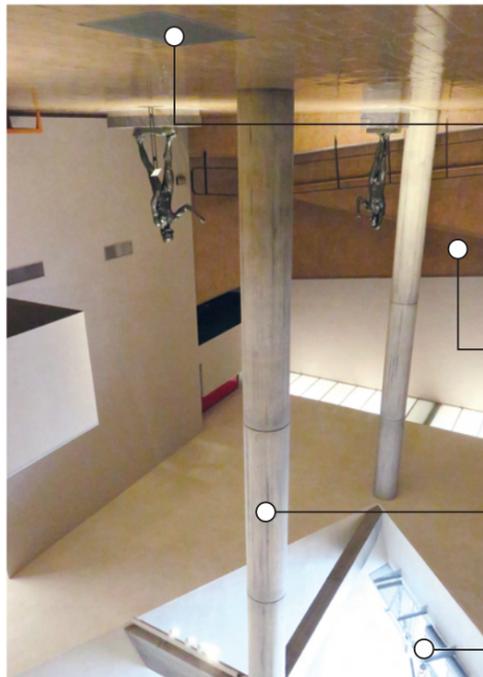
中3階(バルコニー)
幅のせまい階段が付いたバルコニー状の小部屋です。会議室や小さな作品の展示空間として作られました。(現在は非公開です)

中3階(照明ギャラリー)
屋上から採り入れた自然光と照明器具による人工光を、2階展示室や19世紀ホールに採り入れるための回廊状の小部屋です。(現在は人工光のみを使用しています)

バルコニー
19世紀ホールに面して設けられた2か所のバルコニーからはホールを見下ろしたり、もろびとつこのバルコニー奥へ視線が放れたり、館内の豊かな空間構成を感じることができます。

2階展示室
19世紀ホールを取り囲むように配された展示室は、天井の高さや所々で途切れた壁の配置によって、多様な空間の広がりや変化を楽しみながら回遊することができます。

外壁/パネル
玉石が埋めこまれた外壁は建物の荷重を支えない、取り外し可能なパネルとして作られています。(現在はほぼ全てが新しいパネルに交換されています)



斜路(スロープ)
ル・コルビュジェが多くの建築作品に用いた斜路は、登るにつれ段々と景色が変わってきます。柱の奥に見える絵画作品や見え方が変わる三角形の天井など、空間の変化をゆくりと楽しみながら移動することができます。

床照明
人工光で作品を下から照らすための装置です。(現在は使用していません)

5つの要点
ル・コルビュジェが提唱した「近代建築の5つの要点」と「無限成長美術館」に含まれる大切な要素のひとつです。



建築物を支える柱と梁
姉小松という木の型枠にコンクリートを流し込んで作られたため、木目が美しく浮き出しています。

三角形のトッゾライト
北向きの明かりとりの窓から、やわらかな自然光が差し込みます。

建築物を支える柱と梁
姉小松という木の型枠にコンクリートを流し込んで作られたため、木目が美しく浮き出しています。

斜路(スロープ)
ル・コルビュジェが多くの建築作品に用いた斜路は、登るにつれ段々と景色が変わってきます。柱の奥に見える絵画作品や見え方が変わる三角形の天井など、空間の変化をゆくりと楽しみながら移動することができます。

床照明
人工光で作品を下から照らすための装置です。(現在は使用していません)

19世紀ホール

ル・コルビュジェが名づけたホールは美術館の核となるよう建物の中心に置かれました。吹き抜け空間が2階や中3階とつながった、複雑な空間を感じることができます。

7か国にまたがる世界遺産

2016年7月17日、第40回世界遺産委員会において、国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジェの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」が世界遺産一覧表に記載されました。7か国17資産で構成される資産が3大陸にまたがって一括登録されるのは初めての事です。これらの資産は19世紀以前の様式建築を批判し、新しい社会の求めに応じた建築を作ろうとする「近代建築運動」の歴史とその世界的影響を証明するものであり、また20世紀という新しい時代における社会的・人間的ニーズに対する革新的な解決策であると認められました。



レマン湖畔の小さな家

スイス



1923
必要最小限の要素で居住者のニーズに的確に応える「最小限住宅」という新しい建築的表現の形を示しました。また、規格化された住宅の一例でもあります。

ペサックの集合住宅

フランス



1924
「最小限住宅」を集合住宅に適用した例で、5平方メートルのユニットを様々な形に組み合わせたプレハブ化・規格化の点でも重要な作品です。

ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅

ドイツ



1927
コンクリート梁の使用により空間の新たな可能性を示し、内部の間取りを変更することができる住宅のモデルとなりました。

イムープル・クラルテ

スイス



1930
プレハブ化・規格化された計画・構造の考え方を示し、コンクリートに代わり窓や壁パネルなどにスチールフレームを用いた初めての作品です。

マルセイユのユニテ・ダビタシオン

フランス



1945
個人と集団のバランスに基づく新しい住まいのあり方の代表的なプロトタイプです。荒々しい表面のコンクリート打ち出し仕上げを用いた作品です。

クルチェット邸

アルゼンチン



1949
提唱から何十年も経て「近代建築の5つの要点」が再び適用された作品です。南米の建築に根本的な影響をもたらしました。

カップ・マルタンの休暇小屋

フランス



1951
モデュロールにもとづき規格化された「最小限住宅」の最も顕著な作品です。

ラ・トゥーレットの修道院

フランス



1953
「近代建築の5つの要点」の考え方をさらに深めて設計されたものです。

国立西洋美術館

日本



1955

ラ・ロッシュ＝ジャンヌ邸

フランス



1923
邸内の斜路やバルコニーを歩くと、景色や色彩が移り変わる流動的な空間を体験できるのが特徴です。当時はまだ発表されていなかった「近代建築の5つの要点」が初めて適用された作品です。

ギエツ邸

ベルギー



1926
自由な形と色彩という新しい建築的言語(要素や手法)を革新的に表現した最初の作品のひとつで、ベルギー内外にこの考え方が広まるきっかけとなりました。

サヴォア邸と庭師小屋

フランス



1928
「近代建築の5つの要点」のすべてを体現した作品です。ル・コルビュジェの建築の中でも最も有名な作品のひとつに数えられます。

ポルト・モリートの集合住宅

フランス



1931
「近代建築の5つの要点」を集合住宅に適用した例で、ガラスの使用によって外部空間との一体感がある作品です。建設後はル・コルビュジェ本人が生涯にわたって居住しました。

サン・ディエの工場

フランス



1946
工場が現代人の社会的・人間的ニーズに対応すると同時に、そこで働く人々が自然との調和を体験できるような建物の考え方を示した作品です。

ロンシャンの礼拝堂

フランス



1950
彫刻的建築の新たな形を確立し、世界の教会建築に影響を与えました。

チャンディガールのキャピトル・コンプレックス

インド



1952
ル・コルビュジェが提唱した都市の考え方(『輝く都市』『アテネ憲章』)に基づくもので、インド半島全体に多大な影響を与えた作品群です。

フィルミニの文化の家

フランス



1955
都市生活の改善を目的とした都市計画の一部として構想され、実現した作品です。

メゾン・ドミノ 1914

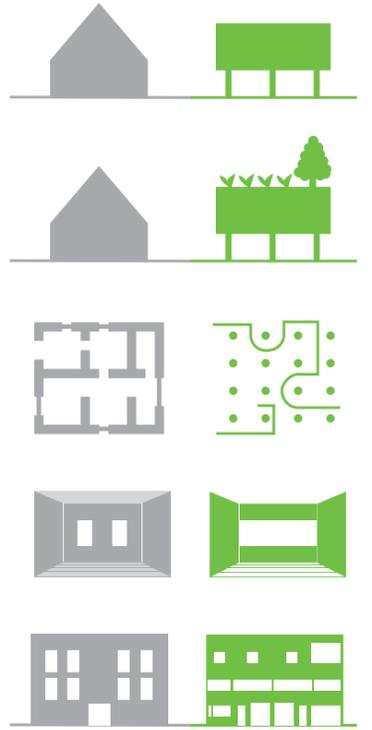
鉄筋コンクリート製の柱と床板で建物の荷重を支え、階段で上下階をつなぐという単純な構造で建物を作る考えです。石やレンガを積み上げて壁を建てることで建物を支える旧来の建築とは違い、柱で床を支えることで外壁や間仕切り壁(内壁)は取り外しや移動が可能となり、自由な間取りをデザインすることができます。工場であらかじめ製作した部材を現場で組み立てるプレハブ化や寸法の規格化、量産化の考えを示しました。



近代建築の5つの要点 1926-

ル・コルビュジェは建築材料や建設方法などの技術的な側面と、生活を豊かにする仕組みの両方を実現することを考え、近代建築を成り立たせる要点を5つにまとめました。

- 1 ピロティ**
柱で建物を持ちあげてできた空間です。人も風も自由に行き来できる気持ちの良い空間です。
- 2 屋上庭園**
雪や雨を落とすために勾配屋根で覆われていた旧来の建物とは違い、鉄筋コンクリートによる水平の屋根に植物を植えることで、豊かな屋上空間を生み出しました。
- 3 自由な間取り(平面)**
柱で床を支えることで間仕切り壁(内壁)は取り外しや移動が可能となり、自由な間取りをデザインすることができます。
- 4 横長の窓(水平に連続する窓)**
壁面の横幅いっぱいにはけられた窓からは部屋の隅々にまで均一な光を採り込むことができます。
- 5 自由な立面(ファサード)**
建物の荷重が柱で支えられたことで、外壁はパネルやガラスで自由にデザインすることができます。



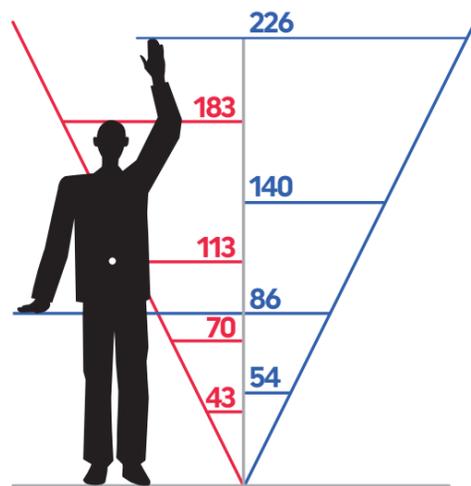
無限成長美術館(美術館計画) 1929-

ル・コルビュジェは1929年から他界するまで36年をかけて繰り返し美術館計画を練り続けました。《ムンダネウム計画、世界美術館》(1929年)は初めての美術館計画で、最上階の中心から螺旋状に展示室を降りてくるピラミッド状の建物でした。《現代芸術美術館》(1931年)は、当時問題となっていたコレクションの増加に対応するため、まず中心の核となる部屋をつくり、作品の増加とともに螺旋状に外側へ展示室を増築してゆくというアイデアで、ピロティの上に正方形の展示室を配する四角い螺旋型美術館の始まりでした。その後も、建設方法が容易で様々な展示に対応することができ、全体的に調和のとれた美術館となるよう研究を重ね、《フィリップヴィル市の美術館計画案》(1939年)で「無限成長美術館」と名づけた美術館のプロトタイプ(基本型)を発表しました。

国立西洋美術館本館は「無限成長美術館」の基本的な原理に基づいて設計され、現在もその特徴を見ることができます。

- 1 ピロティを通して中央のホールへ入り、そこから始まる四角い螺旋状の展示室を巡ること。
- 2 卍型の中3階が設けられていること。
- 3 展示室を仕切る壁の長さによって室の大きさを変えたり見通しを与えたりして、様々な空間が作られていること。

モデュロール



ル・コルビュジェは人間の身体に沿った建築を目指して、世界中で使うことができる尺度である「モデュロール」を考案しました。男性の身長183cmと、へそまでの高さ113cmの比が黄金比1.618:1になることと、113cmの2倍で、この男性が手を伸ばした高さである226cmを基準として、赤と青の2種類の尺度を作り出しました。このモデュロールの寸法を足したり、隣り合わせて使うことで建築に統一感やリズムが生まれます。